

令和2年7月豪雨

# 熊本教区寺院・檀信徒に被害

7月3日から九州、西日本、東日本など各地を襲った令和2年7月豪雨は、死者75名・重軽傷者14名、行方不明者10名、(内閣府発表・7月15日現在)の人的被害のほか、多くの家屋に被害をもたらし、各地で大きな爪痕を残した。

浄土宗に寄せられた情報によると、豪雨により熊本県南部に位置する3カ寺(7月9日現在)が床上・床下浸水の被害を受けた

ほか、檀信徒も被災。熊本県相良村の深水寺(稲田龍則住職)は、球磨川支流の川辺川が氾濫、本堂と庫裏(居住場所)が床上浸水。同県水俣市の西生院(濱田智海住職)でも、水俣川の氾濫で、境内が浸水するなどの被害があった。

特に被害の大きかった同県芦北町の来迎寺(瀧田公徳住職)は、隣接する佐敷川が氾濫し、本堂と庫裏1階が浸水した。仏具や法衣、生活用品は泥水に浸かって、使用不可となり、境内にも倒木や土砂が流入した。

瀧田住職は、「庫裏1階中程まで浸

被災直後の深水寺の様子。本堂に土砂が流入した



水したときは、命の危険を感じました。それから私はご本尊と過去帳を、妻は食料などをもって急いで庫裏2階へ避難しました。本堂や庫裏1階が水没する状況に途方に暮れましたが、そうしたなかで、近隣や、九州各地の僧侶が支援に駆けつけてくれたことに、元気をもらいました」と話す。

被災直後、来迎寺でボランティア活動を行った三宅俊明師(熊本県荒尾市・浄業寺住職)は、「大雨が小康状態になった5日から有志の僧侶4名で復旧作業をはじめました。多くの人手が必要ですが、コロナ禍もあって、密にならないよう注意しています。また県外からのボランティアを受け入れていない自治体も多く、今後の課題です」と話す。



来迎寺でのボランティア活動の様子。本堂内陣に流入した土砂を洗い流している(7月9日撮影)

今回の大雨を受け、浄土宗は総本山知恩院(京都市東山区)と共同で被災寺院に、ブルーシート・タオル・雑巾など応急物資の送付や、浄土宗教師のボランティア保険の加入代行を行った。